感情労働の視点からの中国高校教員に対するメンタルヘルスのへの支援

―中国天津市区立 A 高校を例に―

Li Haozhi

大学入学試験は中国全国の高校生にとって「人生の交差点」だと言ってもよい。高校教員は、一年生の頃から三年生の頃までずっと「大学入学試験」という最終目的を目指して働いている。近年、中国の高校教員のメンタルに関する状態はずっと社会から注目されている。本論文は「感情労働」の視点で中国の高校教員のメンタルヘルスを探究する。筆者は中国天津市 A 高校の教員を研究対象にし、ヒアリング調査で論文を執筆した。

本論文は主に四つの論点がある。

一つ目は、A 高校教員たちの感情労働は事務系と教育系という二つのパターンがあるということである。事務系での感情労働はよく教育審査員の授業傍聴では見られており、それは教員に本職と認められず、仕事に対して疎外感や嫌悪感、多忙感が生じる。

二つ目は教育系の感情労働である。まず対象が生徒と保護者という 2 種類があり、生徒を扱う場所は教室や職員室、廊下また修学旅行などの校外で行われている。それぞれの感情労働は異なっており、教員たちは勤続年数が長くなりつつ、生徒への接し方である演技も自然な「教師らしい表現」になってしまう。また生徒を扱うことには基準のラインもあり、それは「生徒の気持ち」であり、教員たちがそのラインに照らして生徒に扱うのである。保護者に対する態度や行動の基準は「平和主義」であり、教員たちはなるべく生徒と保護者とのトラベルを起こさないように感情をコントロールしている。

三つ目は、高校三年生という特殊な時期に、高一や高二と比べて教員の感情はもっと温和的になったという点である。何故ならば教員のローテーション制である高一から高三までずっと同じ教員チームで担当する制度、受験生になった高校三年生は自主的に頑張って勉強する態度への変換、教員が生徒の精神面的な配慮と心理ケアの重視という三つの原因がある。

四つ目は上記の内容を分析した上で、A高校教員のメンタルヘルス支援策を作って説明すること

である。具体的には田村[1]の「三層支援」を参考にし、まず事前対応策と事後対応策に分けて個人(自分、上司・同僚)、組織(学校)、チーム(教員同士集団)、それに加えて四層目として生徒(感情労働の対象)からの支援からなる四層支援を考えた。ここで重要なのは教員個人に自分が感情労働者という概念を自分で気づき、理解してほしい。また「弟子・師匠関係」のチームからの支援を論文で述べていた。組織からの支援では、学校に改革を実行し、教員を事務系の仕事から開放することはよいと思う。また第四層としての生徒からの支援は、一般的な感情労働で見られない教員と生徒との「絆」を活かすという点である。そのような絆は、教員たちの心理ケアに非常に大きな効果をもたらす。教員と生徒の絆をどのように活用すればいいだろうか。筆者は、ただ社会からの注目だけでは十分ではないと考える。学校は毎年の教師の日[2]で教師への感謝イベントを行ったり、ホームルームを利用して先生と一緒に料理を作ることや映画鑑賞をすることなども良いと思う。また校友会を創設し、絆を制度化することも良い。上記の内容はあくまで要約である。詳しい内容は本文を読み進んでもらいたい。

---

[1] 田村尚子、2018、『感情労働マネジメント』生産性出版.

[2] 教師の日は毎年の 9 月 10 日